

# あんげろす

## 遺恨試合 — 音楽への想い

深谷 美枝

一年前から声楽とピアノを再開している。1度目は中学生の時、2度目は35歳、そして今度は六十の手習いである。

歌は二人に師事したが、変わった方たちで、ものにならないばかりか、迷路に入ってしまった。ピアノは頑張っていたが、20年ブランクが出来て、弾けていた曲も大半は弾けない。

このままでは、死んでも死に切れない。お化けになりそう。心底そう思った。遺恨試合みたいなもん、である。

今度の師は、歌の先生はオペラ至上主義者で、初めからオペラを歌わせられている。ピアノの先生はショパンコンクールアジア大会の入賞者で、ショパンの弾き方を丁寧に見てくれる。ノクターン1番、15番、遺作をやり直した。

アンチエイジングと思っているがどうしてどうして、頑張ってしまう。ピアノも買い替えて、ホフマンのグランドピアノが12月に来る。

ふかや・みえ（所員）

第86号

2022年1月



## 付度の働かないイギリス政治に思うこと

八木 隆之

7年近く過ごしたエディンバラから帰国して、2年目の初冬を迎えています。私の住む八ヶ岳では、色鮮やかだった紅葉も色を失い、カラカラと陽気な音を立てて道路に舞っています。雨が多く仄暗いスコットランドの晩秋とは、だいぶ違った日本の風情です。

今回は、自己紹介を兼ねて、スコットランド滞在中の思い出を皆さんと分かち合いたいと思います。スコットランド滞在中を通して、ひそかに楽しみにしていたことは、イギリスの政治に関するニュースをローカルなメディアを通してチェックすることでした。折しも、私たちが2013年にエディンバラに越してからの7年間は、イギリス政治の歴史的な転換期となりました。2014年に行われたスコットランドの独立を巡る国民投票から始まり、2016年のEU離脱を巡る国民投票、そして正式に離脱をした2020年までの混乱と緊張を肌で感じてきました。私も留学生の立場でありながら、政治の風通しの良さも手伝って、ついつい引き込まれてしまったことを今でも思い出します。

中でも驚嘆させられたことは、国会審議の優位性を巡る問題で市民が時の政府を相手どって訴訟を起こし勝訴するような例が何度か起こったことです。その一つは、EU離脱の正式なプロセスの始め方を巡る訴訟でした。当時のメイ政権が国民投票の結果を受けて、政府が適切と判断した時にプロセスを始めようとしたところ、ジナ・ミラー (Gina Miller) という女性が国会審議による承認がなければ政府はその手続きを始めることができないのではないか、ということで政府を相手どって裁判を起こしたのです。裁判の結果、なんと政府が敗訴となり、国会の審議によらなければ政府は離脱の手続きを始めることはできないことが判決として出されたのです。

もう一つのケースは、2019年の夏に発足したばかりの

ジョンソン政権が国会の開会を長期に渡って延期しようとしたことの正当性が争われたものです。その当時、同年10月31日に迫っていた正式離脱の期限の数週間前まで開会が延期されていたために、野党や反対者たちからは、国会における離脱に関する議論から逃げているのではないかと批判され、政府が訴訟されるという事態に陥りました。この場合も、「政府が国会の開会を延期するという行為は違憲である」という判決が出ました。この判決を受けて、国会は直ちに翌日召集され、審議が粛々と進められたのでした。

どちらのケースの場合も、先ほどのジナ・ミラーが中心となって訴訟を起こしています。一市民が政府を相手どって訴訟した結果勝訴するという、日本ではまずありえない構図と審議プロセスの素早さに、心底驚かされました。しかし、改めて冷静に二つのケースを並べて考えてみますと、両者とも国会の優位性という民主主義の根幹に関わる問題であったことがわかります。つまり、政府とは言っても、国会の承認を得ることがなければ好き勝手に国会を閉じたり、特定の世論をバックに行動を取ったりすることは許されないことを両者の判決は示しています。極めて政治的な問題について、時の政府に違憲判決を速やかに突きつける司法の独立性 (付度のなさ) には、イギリス社会の成熟を垣間見たような思いがしました。日々の生活の中では暮らしにくいと感じたこともたくさんあったのですが、この点だけは純粋にうらやましいと感じたのをよく覚えています。

翻って日本では、今年6月に通常国会が休会して以来、国会での本格的な審議は一切行われていないようです。菅前政権は、コロナの感染拡大が続き、混乱が深まる中で、野党4党が憲法に基づいて臨時国会の召集を要求したにも関わらず、それを拒否してきました。また岸田新政権は、野党が要求していた予算委員会を開くことなく特別国会を閉会し、次期の臨時国会は12月まで開かれないう予定で調整されているようです。真の民主主義が浸透していくための道のりは長いと感じざるを得ませんが、

少なくとも選挙で一票を投じるのみならず、きちんと監視していく責任を果たさなければと思われています。

やぎ・たかゆき（協力研究員）



イギリスの国会議事堂あるウエストミンスター宮殿  
※国土交通省 国会等の移転ホームページ、Web ニュースレター 世界の国会議事堂より引用

[https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/iten/service/newsletter/i\\_02\\_71\\_3.html](https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/iten/service/newsletter/i_02_71_3.html)

## 小さな畑

村上 志保

一昨年生まれ育った茨城の実家に戻り、昨年からは自宅の空き地で小さな畑を始めた。祖父母の代には祖母が自宅用に農作物を作っていたそうだが、両親の代になるとほとんど畑は作らず、かつて畑だったところにはすっかり芝や草が生い茂るようになってしまっていた。そんな土地をシャベルで耕し始め、畝を立て、野菜を作ってみることにした。

もともと畑を見るのは好きだった。多様な作物がそれぞれの場所を占めながら育つ畑は美しいと昔から思っていたが、特にここ数年は自分の畑を持ちたいという思いが強くなっていた。茨城の実家に居を移すことで、いよいよその機会が訪れたのである。全くの初心者であるが、ただ農作物を作るというだけではなく、自然環境を尊重

することや農薬を使わないことを目標とし、無肥料、無農薬（+不耕起）を基本とする自然農法を実践してみることにした。

自然農法と位置付けられる農法はいくつかあり、互いに対立的であるというわけではないが、方法や考え方の違いによって「自然農法」、「自然農」、「自然栽培」などに分類される。私はそれらの違いを理解しきれていないわけではないし、違いにこだわるほどの経験もないため、とりあえずそれらの農法をまとめて「自然農法」とここでは呼ばせていただく。日本において現在の自然農法へと至るその明確な源流となったのは、岡田茂吉氏や『わら一本の革命』（1975年）を記した福岡正信氏の主唱した農法である。現在では自然農法を広める人々はさらに増え、方法も発展・多様化し、奇跡のリンゴで有名な木村秋則氏も自然農法を実践する一人である。当然ながら海外にも自然農法に通じる様々なノウハウがあるようで、そのあたりも今後学ぶ機会を持てればと考えている。

とにかく私は、田舎育ちであるにも関わらずエダマメとは大豆のことだったとこの年でようやく知ったような全くの素人で、今は本や動画を参考に学んでいる段階である。それで学んだやり方を実践してうまくいく時もあるればいけない時もある。基本的には低い打率で、虫にくわれたり、あまり育たなかったりということもしばしばである。今年初めて植えたサツマイモの苗からは、一つの苗から2、3本程度しか採れなかった。一方春菊、ニンニクや落花生は初めてでもまあまあうまくいった。自然農法では刈草を畑に敷き、微生物や虫がそれを分解し自然の肥料にする（状況によっては米ぬかや油粕等を撒くことは基本的に認められている）わけであるが、まだ十分に土壌が豊かになっていない私の畑ではそれなりの大きさで、安定した量の作物を収穫するのは概して難しい。天候にも左右され、特にこの二年は梅雨の時期に長雨が続き、湿気でかなり作物がやられた。このような経験を通して、農作物を作ることは決して簡単ではなく、スーパーに並ぶような作物を作るのは極めて難しいというこ

とがわかった。長年自然農法で畑を作っていたら次第に土壌が改良され豊かになり、安定して作物が採れるようになるというが、それでも商品として販売し、生計を立てるまでに至れている人はごく少数であるようだ。

私の畑は自然農法でやっているが、化学肥料を投入し農薬を散布する慣行農法を批判するつもりはない。実際に農作物を作ってみて、商品として出せる農作物を安定して供給することの難しさ、そしてその多大な労力をわずかではあるが知った。まして購買者側が見ためのきれいな商品を選ぶのであれば、農業従事者が収入を確保するために今の方法を採らざるを得ないことは十分に理解できる。

まだまだ細々としたままごとのような農作業ではあるが、自然との関わり方は以前とは変わってきたように思う。そして、いつか自然の力と人間の手作業が調和した美しい畑になればと少しずつ畑を広げているところである。来年は大豆をたくさん育てて、それで自家製の味噌を作ることを目標にしているが、さあどうなることでしょうか。

むらかみ・しほ（客員研究員）



『自然農法 わら一本の革命』福岡 正信著、2004年。

## 雑録

田中 祐介

主任業務のひとつとして、クリスマスカードに掲載する聖句を決めるように所長から仰せつかった。少し思案したが、決めるのに時間はさほどかからなかった。個人的に最も印象深いたとえのひとつである「迷い出た羊」のことを思ったからである。

マタイによる福音書の第18章、第12節から14節にかけて次のことばがある。「あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくと、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」（新共同訳）。数の論理が及ばない「一匹」の存在にどう向き合うか。様々に解釈もされるこのたとえを、ずっと心に留めていた。

遡ればこのたとえを知ったのは、私が日本の近代文学を専攻する学部生の時に読んだ福田恆存の評論「一匹と九十九匹と」によってであった。太平洋戦争の敗戦からまもない1947（昭和22）年にこの文章を発表した福田は、このたとえを大胆に読み替え、政治と文学の本質的な差異を言いあてた言葉として受けとめた。政治は全体、すなわち「百匹」の羊の救済を試みるが、そこには迷える「一匹」が最後に必ず残る。その「一匹」の存在に気づき、寄り添うことが文学の使命であると福田は説いたのである。

福田は「この一匹の救ひにかれは一切か無かを賭けてゐるのである。なぜなら政治の見のがした一匹を救ひとることができたならば、かれはすべてを救ふことができるのである」とも述べる。「一匹」の救いが全体の救済になることの意味を、学部生ながらしばしば考えたものである。

時を経て2013年、東日本大震災の復興に関する展示企画で、私は福田の文章を主題にしたパネルを制作した。復興に向けた取り組みが徐々に進み、時間が経過するなかで、復興や絆の大きな力が及ばない「失せた一匹」の存在に、いかに文学、延いてはあらゆる芸術が気づき、寄り添うことができるかという主題であった。

「迷い出た羊」のたとえば、新型コロナ禍を迎えた最近もよく思い出し、その意味を考える。国内外の報道に接し、あるいは日々の生活を過ごすなかで、自分の視界から見えない「一匹」はどこに潜んでいるだろうか。とりわけ大学で教える身であるゆえに、学生や教職員、大学に関わるすべての人々を想像しながら、そのようなことを考える。

たなか・ゆうすけ（主任）



『福田恆存評論集〈第1巻〉一匹と九十九匹と』

福田恆存著、麗澤大學出版會、2009年。

研究所活動（2021年7月～2021年11月）

天皇と社会研究プロジェクト主催 公開研究会

「忘れ去られた「アーメン」の声

—二重橋前平癒祈願から明治神宮へ—

開催日時：2021年7月3日（土） 15:00-17:00

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

講師：平山昇氏（神奈川大学 国際日本学部 国際文化交流学科 准教授）

キリスト教研究所 1日研究会

開催日時：2021年7月31日（土） 15:00-17:40

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発表①

「キリスト教伝道と明治期の子どもの読み物

—キリスト教児童文学の受容と変容—

発表者：柿本 真代（協力研究員・京都華頂大学准教授）

コメント：中野 綾子（所員）

発表②

「日本の音楽教育とキリスト教

—韻律（ミーターと音数律）の視点を中心に—

発表者：安田 寛（奈良教育大学名誉教授）

コメント：長谷川美保（協力研究員）



2021年度アジアキリスト教歴史文化講義シリーズ

(各回 18:40-20:10)

第5回 10/5 (火)「現代中国の政治とキリスト教」

講師：松谷暁介 協力研究員

第6回 10/19 (火)

「アジア太平洋戦争と日本のキリスト教」

講師：原誠氏 (同志社大学名誉教授)

第7回 10/26 (火)「三浦綾子がキリスト教に出逢うまで

——若き日の短歌を中心に」

講師：田中綾氏

(北海学園大学教授、三浦綾子記念館館長)

第8回 11/2 (火)「音楽とキリスト教」

講師：服部弘一郎氏 (映画批評家)

キリスト教研究所公開講演会

「韓国におけるキリスト教系の新宗教運動の歴史と現状

—日本で活動する団体を中心に—」

開催日時：2021年11月27日(土) 15:00-17:30

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

講師：卓志一 (タク・ジイル・韓国釜山長神大学教授、

月刊『現代宗教』編集長、カナダ St. Michael's College,

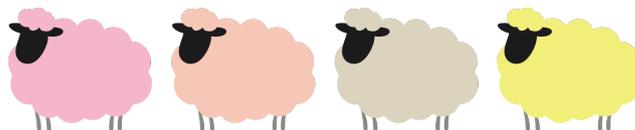
University of Toronto (Ph.D., History of Christianity)

通訳：卓志雄 (タク・ジウン・日本聖公会東京教区イン

マヌエル新生教会主任司祭)

新着図書

- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2021。
- ・『エイコーン』第49号、教友社、2021。
- ・『キリスト教文化』第17号、かんよう出版、2021。



MEMO



---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第86号

---

2022年1月14日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩